



FD 学生の声コンクール 2016

Hosei University Student Opinion Competition for Faculty Development

2016年度(第9回)のキーワードは「教室」「出会い」。

第9回を迎えたFD学生の声コンクール。より柔軟な作品を制作できるよう、今回からテーマをキーワード式に変更しました。今年のテーマは「教室」と「出会い」。日々、皆さんが授業を受ける「教室」と、新たな知識や経験、人との「出会い」を様々な視点から表現した作品が数多く届きました。大学という多様な環境に身を置くことで考えさせられたこと、自分自身の心を大きく揺れ動かしたことなどが作品として表現され、ともに学ぶ学生ばかりでなく、それを支える教職員への大きな刺激にもなっています。



「未知と出会う」

文学部日本文学科4年
大野沙紀



私は、いま、卒業論文と向き合っている。
3年生の終わりのころから、ずっと、この卒業論文と向き合い続けている。
本当にゴールにたどり着けるのだろうか…。
そのような不安を心に抱きながら、いつも通りパソコンの文字たちと格闘している。

あるとき、ふとこんなことを思った。
入学して間もない1年生のころの私に、いまの私の様子を見せたら、どのような反応をするだろうか…と。

実は、大学に入学した当時は、今研究している題材を卒業論文で扱おうとは、全く考えておらず、高校で学んだ、ある文学作品を研究しようと思っていた。
想いが大きく変化したのは、大学1年生のときに受講した学科の授業だった。

その授業は、高校ではあまり扱わない、江戸時代の文学作品について、毎回グループで内容の面白さや気になる点を話しあうものだった。

取り上げられる作品は、高校の教科書には絶対に掲載されないような、江戸の戯作や詩歌だった。
大学に入学したばかりの、専門知識を持たない私が読んで、
思わずクスリと笑ってしまうような話、
21世紀のめまぐるしい世の中で暮らす私たちにも共感できるような感情、
150年以上前の人々の暮らしや文化が垣間見えるような文章、
雅俗の要素が入り混じる不思議な世界観。
どの作品の内容も、新鮮で、高校までに感じたものとは違う、「面白さ」を感じた。

大学の授業は、未知との遭遇だと思う。
1年生の時に、あの授業を受けていなかったら、江戸の文学・歴史・文化とは出会えなかっただろうし、奥深い「面白さ」を知ることなく卒業してしまったかもしれない。

大学4年になった今、
そんなことを考えながら、傍らにある、大好きな江戸時代の文学作品へと想いを馳せる。

● 講評 ●

この作品の一番特筆すべき点は、テーマである「出会い」の対象を「未知」としたところ。実態のない「未知」への遭遇の高揚感を、時の流れと授業での経験とをうまくからませて表現しています。また、行間や語数の使い方にも工夫の見られる作品です。



「40年後の私」

大学院理工学研究科
システム理工学専攻2年
竹内泰人



「私は重力波の研究を40年間してきました」
残蝉喧しい九月も半ば、秋学期最初の講義でのこと。その教授への第一印象はあまり良いものではなかった。丸眼鏡によれよれのシャツ、ぼさぼさの髪型、そしてやや丸まった背中。格好に頼着しない研究者気質の人、という私の勝手な推測は、しかし多くの学生が抱いた感想でもあると思う。ところが講義が始まり、教授が自己紹介として言ったこの一言に、私は一気に心をつかまれた。

教授が語る研究の話は、同時に教授の人生の話だった。40年間ただ一つのことを追い求め、挫折と少しの喜びを繰り返した物語。言葉の端々から教授の苦勞や、流した汗と涙が垣間見えた。次第に、目の前に立つ教授を『教授』という記号ではなく、自分と同じ血肉の通う一人の人間として認識し始めていることに私は気づいた。

教授が自己紹介を終えた時、私の胸は感動にも似た感情で溢れていた。一つのことによって人生を捧げてきたその覚悟、執念、矜持。一人の人間の人生を間近で見たような気がして、私の目頭は熱くなった。同時に、最初に教授を見た目で判断した自分を恥じた。20歳そこの自分が、その倍ほどの年月を研究に捧げてきた人間を、見た目と言う浅い判断基準で計ろうとしたことが、あまりにも恥ずかしいと思った。

40年の重みは私以外の学生の心も打ったようだった。眠りに落ちている学生は一人も居ない。どころか背筋を伸ばして姿勢よく聞いている学生も多い。講義が終わってもすぐに教室を出ていく学生はいなかった。アンコールをせがむ観客の様に、皆もう少し話を聞きたがっているのが雰囲気から察せられた。

翌週のある日、電車の中で偶然その教授を見かけた。私は思い切って話しかけ、教授の講義を受けていること、その講義で感銘を受けたことを話した。すると教授は、嬉しいですねえ、と笑った。
「私もね、40年間研究してきて学生にいろいろ教えていますけど、それでもわからないことだらけですよ。勉強することは尽きないですねえ」
教授は目尻に皺をつくりながらどこか嬉しそうに話した。私は教授の勉強意欲とあくなき探求心に驚いた。40年間研究してきてなお、世界の『真理』を追い求める志の高さ——。目の前の人間を私は素直に格好良いと思った。そして、この人のように志高く、一つの道を究めたいと思った。

この教授と出会ってから私は、『学ぶことは人生そのもの』だと考えるようになった。何を当たり前なことを、と思うかもしれない。しかし、自分の得た知識なり、経験なりが自分の人生を形作っているという意識、感覚を強く持つようになったことで、私の怠けがちな生活は変わった。それは、何となく過ごしがちなこの学生生活も40年後の自分に繋がっていると考えると、『やらなければ』という危機感と『やってやろう』というやる気が沸いてくるからだ。40年後の自分が、教授のように一つの道をひた走る格好良い人間になっているよう、今日も私は『学び』を積み重ねていく——。

● 講評 ●

最初の授業時によくある担当教員の自己紹介での何の気ない説明が、これだけ受講生の感動を呼ぶのだろうか…。おそらく、この先生の真摯かつ謙虚で一途な研究姿勢が、学生の心に響いたのだと思います。少し羨ましくもあり、素直にあやかりたいと思いました。

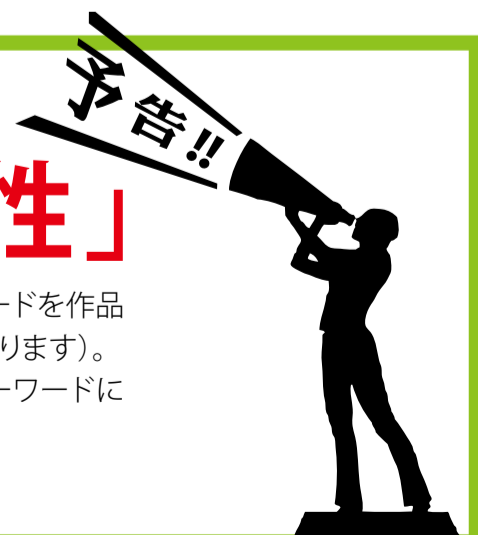
※学生の所属・学年等、本紙面に掲載した情報は受賞時のものです。

作品募集テーマ決定!

「時間」and/or「可能性」

これらのキーワードから1つまたは2つを選び、授業に関するエピソードを作品にしてください。形式は自由です(ただしA4用紙1枚以内、日本語に限ります)。これらのキーワードを使用しなくても構いません。作品の内容にキーワードに関する内容が含まれていれば結構です。

応募の詳細は2017年7月頃にお知らせします。



FD 学生の声コンクール 2017